



「気象庁物語 天気予報から
地震・津波・火山まで」

古川武彦 著

中央公論新社，2015年9月

180頁，740円（本体価格）

ISBN 978-4-12-102340-7

大気は人間の営みだけでなく、地球上の生きとし生けるものにとって、必要欠くべからざるものである。また、大気現象には国境がなく、その観測には国際協力が必要である。この大気の状態の観測の任を担っているのが、日本の気象庁をはじめとする世界各国の気象機関である。2015年は、気象庁の前身の東京気象台が1875年（明治8年）に明治政府が招聘した「お雇い外国人」による定常的な気象観測が始まってから140年（戦後70年）、今年には1956年中央気象台から気象庁に変わって、新たな出発をして60年という、気象庁にとっては記念すべき年々であり、本書の出版は時宜を得たものといえる。本書では、気象庁の変遷について折々のトピックを縦軸に、横軸には著者自身がかかわった事例や人々を織り込んで、今日までの歴史を語っている。

著者の古川武彦氏は、1940年滋賀県生まれ、気象庁研修所高等部（現気象大学校）卒業後、大阪管区気象台潮岬測候所を皮切りに、気象研究所、福岡管区気象台、札幌管区気象台、気象庁予報課長などを歴任し、40年間にわたって気象庁で、勤務され、研究、観測、予報行政などの仕事に従事された。さらに、退職後も気象協会に勤務し、まさに「気象業務」とともに人生を送ってこられた方である。本書は、この気象庁の業務、歴史的発展について、わかりやすく解説した好著で、気象に携わる人には必読の書とも言える。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 東京気象台の創設
- 第2章 日露戦争と室戸台風
- 第3章 太平洋戦争
- 第4章 海は荒れて
- 第5章 コンピュータ時代の到来
- 第6章 地震・津波・火山
- 第7章 気象衛星「ひまわり」の打ち上げ
- 第8章 今日の気象サービス
- 第9章 地球温暖化，異常気象

第1章から第3章は、東京気象台の設立、日露戦争のときの天気予報、太平洋戦争中の陸海軍気象部との確執など、主に戦前の気象庁の歴史について、あまり知られていない事実、知られていることについてもより深い側面が示されている。気象学会については、1882年に「東京気象学会」として発足し、1888年「大日本気象学会」に発展し、1892年には旧幕臣の榎本武揚が会頭に推挙されたとの記述がある。

その後の章では、主に、戦後の気象庁の発足、ラジオゾンデ、気象衛星、富士山レーダ、アメダス、ウィンドプロファイラの観測機器、数値予報のための大型コンピュータの導入など、気象庁の予報技術向上を目的とした大規模な設備拡充の過程が、著者自身の体験を含めたエピソードが興味深く紹介されている。日本経済の戦後の復興から高度成長時代と軌を一にして、気象庁の観測体制が整備発展したことがわかる。著者が潮岬測候所勤務時代に、ラジオゾンデ観測にかかわられたためか、高層観測についての思い入れはより深いようである。

第8章「今日の気象サービス」では、社会環境の変化のなかで、天気予報の精緻化に加えて、国民の安心安全を確保する目的から、気象庁がこれまでの技術官庁から防災官庁へと役割を変貌させてきていることが紹介されている。台風や大雨、竜巻などの気象災害の被害調査は、以前から研究機関、いくつかの学会が積極的に行ってきたが、最近では気象庁の積極的な姿勢が見られることにも現れている。また、気象庁のホームページは充実していて、現在の天気観測資料は、気象庁のホームページで容易に見ることができる。このことも、本書で触れてくだされば、気象庁のサービスがより身近になったことが、一般の読者により深く理解されたと思う。

国際協力については、気象庁の世界気象機関での活躍、JICAによる発展途上国の人事育成の協力がある。評者の南アジアや東南アジアでの気象官署における体験では、日本の高度な気象観測技術や予報技術への向上には、気象庁に対する期待が大きいのが、このためにはお互いの長期的な展望を持った計画が必要に思う。

最後に、気象庁の担う数多くの業務を、この一冊にうまくまとめられたことに敬意を表する。著者の気象庁に対する愛情が満ち溢れた一冊と感じる。

（京都大学東南アジア研究所 林 泰一）